

漢 拏 山 登 頂 記

——濟州島総合調査——

倉 谷 明 子

一漢 拏 山—

隣国でありながら、韓国の最高峰が漢拏山（1950m）と呼ばれる山であり、そしてそれが濟州島に座することは、あまり知られていないと思われる。

朝鮮半島には、白頭山（2744m）冠峯（2541m）胎胎山（2435m）等の2000m級の山々があるが、今はすべて北朝鮮となっている。

韓国の主な山脈としては、半島の東側に大白山脈があり、雪岳山（1708m）を含んでいる。ソウルの北東に位置するこの山は、秋の紅葉が美しいと聞く。また、半島南部には、智異山（1950m）を最高峰とする小白山脈がある。このように韓国には2000mを越す山はない。しかし、漢拏山に登頂することにより、この一山が、日本にある3000m級の山々と匹敵する要素をもち合わせていること、最高峰としてスケールと厳しさに称えられた山であることを、思い知らさせる。

濟州島は、島すべて漢拏の一山であるといってもさしつかえないだろう。島の中央に位置するこの山は、アスピーデ火山で、玄武岩と安山岩からなり、頂上には火山湖である白鹿潭が豊かな水をたたえている。その地形の特徴は、なだらかな裾野と、広大な草原地帯である。1950mという高さを感じさせないほど広い裾野は、海辺にきてその沢が地下を作り、滝となって海の底へ続く様子を思い起こさせる。また、標高約500mのところ

にある草原地帯は、現在牧場として多く利用されている。人々は、この山の自然創造の中で生きていくといえる。そして、緩やかに標高を上げていく山容は、頂上直下1800mから急にせり上り、岩峰となる。間を走る沢は急峻で、特に南北におちるそれは、5万分の1地図のなだらかな等高線の中に、明白にきざみこまれている。そして、頂上付近から発する沢の多くは、その上部が岩壁となっている。冬期には、積雪も本土の山々より多く、本格的冬山として人気がある。

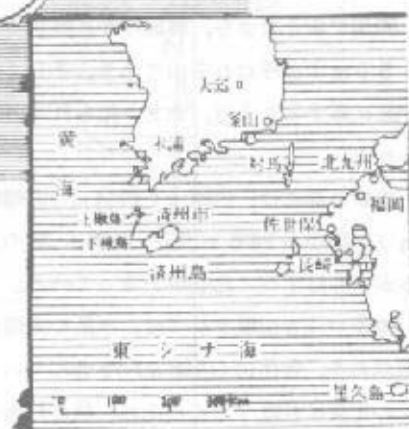
一登 頂 記—

8月14日 昨日と同じ夜明けがやってきた。雨は我々の期待に反して、やむ様子をみせては強く降り、また小降りになるというくりかえし。すっかり居着いてしまった感のある広坪里に、今日こそは別れを告げるつもりなのに……。

今日も畑仕事は休みなので、梁家の朝食は遅い。8時過ぎに、いつものごとく、ムギ飯とミソ汁、少々野菜味が丸いおせんべいのせられてきた。中央にデンとおかれたムギ飯の山も、今朝はすっかり平らげてしまった。初めはその山を半分もくずせなかったのに、朝晩毎回のムギ飯で3日間、我々にもそのおいしさがわかってきたらしい。

天候が悪いので、安全策をとり、一九八中文里へ出て、再び横断道路から登山口に取り付く予定であったが、少々運動不足の我々は、一回生2人

- × 支石墓
- ▲ 立石
- 古墳
- 観光地その他



の希望もあって、横断道路に向い、東へ横ぎることに決定。5万分の1地図、あるいは済州島全区でも、心細げではあるが、道が記されている。また、梁氏の話しによると、大変あぶない道ではあるが、道はついているし、途中、しいたけ作りの人家があるということなので、なんとかなるだろうと……。9時、8日間も快く我々を間借りさせて下さった梁家の家族に見送られて出発。杉木立に囲まれて、ぽんとひっそりと民家の立ち並ぶ広坪里を後に、漢拏山へと向う。

道は広坪里の水場の上から始まり、草原地帯で突然落ち込んでいる川筋を渡る。玄武岩が、火山特有の沢の様子を形作っている。水場は、この自然にできた岩の大きなくぼみに溜まった雨水である。この島の沢は、中間位で伏流して、かかっている。

水場の北の畑の間をしげうく歩くと、2m幅位の道に出る。しかし、これも不鮮明で、時々踏跡がわからなくなったりするが、一昨日に訪問した下花田里の牧場の大きな近代建物が、よ

い目じるしとなってくれる。ここもその牧場の敷地内であり、どうやら東の境界になるらしい。ここから見ると、このあたり一帯は、えんえんとなだらかな緑の草原地帯で、やさしく隆起した草山との、のどかな景色である。1日に我々を広坪里の近くまでトラックで送ってくれた、牧場のアメリカ人技師の言葉を借りると、「LIKE HOKKAIDO」であるらしい。

雨は相変わらず、時折スコールのように強く降る。幸い、ガスはあまり出でず、視界がきくので助かる。こんな所で後先が霧にまかれてしまえば、立ちすくむ他、手はなさそうだ。横断道路までの道程と、この天候を考えると、地図と磁石を何度も何度も真剣に見ざるをえない。

十分に水を含んだ草の上を歩くこと一時間半程

で、牧場の東北端の石垣に出合う。そこから林の中の登りとなるが、より明確に2m幅の道が続いている。このあたりの林は植林らしい。道はどうかやらあっているらしいが、とにかくたどりつくまでは不安。50番（5万分の1地図記載のピーク）をまわり込んで、林の中、水たまりの道をザブザブと進むと、ドオーツと地の底をひっくり返すような音が聞こえてくる。増水した沢の音であるらしい。こんな所で鉄砲水に出合ってはと、ドキッとし、思わず逃げる場所をキョロキョロとさがしたりする。

しばらくすると、突然人家が見え、感激する。（11:30）ここはしいたけ栽培のための小屋で、夏場のものらしい。少し日本語の話せる主人がいて、横断道路がもうすぐだとわかり、大感激。とにかく小休止。小さな男の子が二人で、私をしいたけ床につれていってくれる。小屋の裏から小さな沢をさかのぼって5分位。バツと開けた台地のまん中に、きれいな小さな池があり、まわりの林の中に、長さ1m50cm、直径15cm位の本が、順序よく並んで並べられていた。大きくなったしいたけは、とんとん取り入れられ、背子で工場となっている小屋に運ばれる。男女約10名が働いており、写真機を向けると笑いかけしてくれる。この地名を聞いてみると、「十七林」だと答えてくれた。

そして、道路まで男の子と犬が案内してくれる。このあたりまでくると、大きな沢が雨でかなり増水している。島とは思えない程水が豊富であり、山中であることを感じさせる。ものすごい早さで歩く少年の後を追うこと25分、待望の横断道路に出る。我々の不安をよそに、完全舗装されたルート99は、かなり頻繁にバスやタクシーが通る。漢拏山麓標高約1000mの地帯を済州市から、南面の中文里へ結ぶ主要道路である。予想外にも、スムーズに横断道路にたどりつき、全身く

し、ぬれなのも忘れて快く道路脇で昼食をとる。

そこからルート99を南へ歩くこと10分、漢拏山登山口に出合う。そこには漢拏山国立公園ときざまれた大きな石碑があり、登山口から5〜7m幅位の道路が続いている。案内図から、この先に小屋があることを知り、今日の日標をそこに決め出発する。昼にはやんでいた雨が、また今度はいっそう強く降ってきた。一時間半程ゆるやかな登りを続けると、目をみはるようなモダンな真新しいロッジに着いた。（14:30）

ずぶぬれの私達に應對してくれたロッジの管理人は、漢字が書ける人なので、漢字を書いて表わしたり、トラの巻を出したりして、何とか明日漢拏山に登ること、今晚泊りたいことを理解してもらった。ここでは、パスポートを提出し、一人30ウォンの自然保護料を払う。そしてワッペンをもらう。我々はロッジの土間のすみに場所をもらい、陣取る。（15:30）その後、夕方になるにつれて人が集まり、土間中人があふれ、歩行困難になる。

隣の大学生グループに、早稲田に留学するという、日本語の話せる学生さんがいて、話がはずむ。「アリラン」を教えてもらい、こちらは、何の因果か早稲田の字歌を教えることになってしまった。

私達は21時に就寝したが、とても寝る様子ではない。彼らはギターを持って来ており、誰が寝ようとかまわず大声で合唱し、手拍子をとって、大騒ぎである。韓国では、ギターをさげた若者グループが多い。山へ来る楽しみの大きな要素を占めているらしい。

その大合唱もいつかやみ、眠りにおちる。

8月15日 5時に目をさます。今日も曇り空。せめて雨だけは降らないでほしい。昨夜騒いでいた連中は、まだ眠りこけている。我々だけがガサ

ガサするわけにもいかず、「郷に入れば郷に従え」とばかり、のんびりしていた。天候がはっきりしないので、出発をためらっていたこともあるのだが……。

6時になると、小屋中が活気に満ちてくる。雲の切れ間から陽が差し込み、天候の方も少し回復のポーズをみせてくれたので、登頂することに決定。

もとより軽い食事が持ちあわせていない我々は、逸早く小屋の雑踏の中から飛び出した。(7:30)5分程で入浴亭に着く。前方に立ち上る岩壁がすばらしい。そこから派せいの道を30分程行くと、登室に出る。ここには仏教寺があり、バラック小屋の中のりす暗い本堂で、いやに賑やかなお経があげられていた。この前から見る岩壁は200mもあろうかと思われる。直立で、屏風のように圧倒的に立ちそびえており、道は頂上に向かって、大きくその岩壁をまわり込んでいる。

ぐんぐん登っていくと、1400m付近で、もう森林の限界を越えてしまったらしい。振り返ると、右手の岩壁に二本の細い筋が見える。それはきっと大きな滝だろう。こうして尾根筋に出たと思ったら、もつすい風と雨にたたかれる……やはり今日も雨。岩壁をまわり込んでしまうと、道は再びゆるやかになり、低木地帯が続く。1600m付近から草原地帯となる。このあたりで濃い霧につつまれたが、よく整備された道と、道標に、随分助けられた。晴れていればどんなに素晴らしいかと思われる自然庭園は、私に、北アルプス、雲の平を思い起こさせた。

そして、1700m付近にあるロッジに到着する。このあたりで、我々の迎ってきた道が、御乗岳方面からの登山道と合流するのだ。(9:40)ここまできると登山者も多い。再び急な登りとなり、しばらくすると頂上直下の岩場が始まる。岩にきさ

みこまれた大きなステップと、打ちこまれた鉄くいが、我々の登頂を助けている。かなり直立した、そして両面にスバツと切れおちた岩場を、もう少しだなあと思いつながら緊張して登りつめると、少し広いところに出る。(10:45)その大三角点を譲りみる。やはりここが最高点1950mなのだ。やった！さっそくカメラを出して証拠写真をとる。

岩場から我々と前後して登ってきた韓国山岳会のメンバーは、我々が日本からきた学生であることを知り、正午から始まる国旗掲揚に参加してほしいと言ってきた。国旗掲揚？…そうだ、今日は8月15日。韓国独立記念日、光復節なのである。そして今年は30周年。しかし、この風雨の中、寒さに耐えきれず、先もあることなので、すぐには登つことを伝え、彼らのつけていた記念日のバッジとフッポンを、我々一人一人にくれた。登頂できたうれしさの上、思いがけない記念品に感激する。

11時。東への道を取り、5・16道路目ざして下山にかかる。この5・16道路は、ルート99と対照的にピークをはさんで東の山麓を走り、島の二大都市である済州市と西海浦を結ぶ最短道路である。細い尾根筋を東へ進み、先行パーティにつられて少し下って行くと、白鹿潭に着いた。ここから我々の下山する方向に道はない。あいかわらずのガスで視界はきかない。しかたなく、近くで遊んでいる若い人達のグループに道を尋ねると、日本語はもらろん、英語もまるで通じず困る。相手は一方的に韓国語でまくしたてる。我々が日本人であることと、我々の行きたい方向はわかったらしいのだが、その説明がこちらには理解できない。とにかくいっしょに写真等をとって別れ、尾根へ戻ることにする。再び東へ尾根上を進むと、こんどは第2ピークともいえる所に出る。ここには大きな登山道案内板があり、我々の取るべき道が理解

できた。

さて、いよいよ下ろうという時、先ほどのグループにまた会う。結局下山道が同じということがわかり、いっしょに下ることになってしまった。とにかく、空荷の彼らのスピードは速い。(これは空荷でなくても速いことが後でわかったのだが。)とてもついていけず、モタモタしている私をみかれて、中でも小柄な一人がやってきた。どうやら「僕がザックをかついてやる。」と言っているらしい。私が両手を振って断ると、「僕は強い。」とボボイのポーズ。ついに私のザックを背に、やはり同じスピードで、数々などがりながらどんどん下って行く。私の方はまるで楽ちんなのだが、すっかり彼らの楽しげなハイペースにまきこまれてしまった。途中の小屋で泊ろうという計画だったのに、いつのまにか6・16道路に出てしまう。東面の漢拏山は頂上直下の岩の多い急な下りをぬけてしまうと、退下になだらかな森林が広がる。一つ目の避難小屋到着(12:40)そして第2の小屋(13:15)ここまできるともうすっかり林の中で、この小屋の近くでまわしがつかまえられていた。

済州市へ帰る便らを見送った後、あまりのあわただしさに、しばらくボカーンとしていたが、とにかく西帰浦行きのマイクロバスに乗る。バスは20分おき位に通る。かなり長い間隠遁生活を送っていた我々には、町が少しうっとうしい。その上西帰浦という都会に出て行くにはあまりの恰好なので、道路が山から出る地点の雲川岳の麓でバスを降りる。近くの部落に、我々を受け入れてくれるような民家を捜しに行くが、誰もが「西帰浦に行きなさい。あそこなら旅館があるし……」と冷たく言う。疲れ果てた我々は路頭にまよってしまった。もう今さらバスに乗る気もなく、西帰浦の方に向かってトボトボ歩く。少し行くと、教会が目にとまった。苦しい時の神頼みとばかり、即決断し

て話しに行く。この御主人は日本語が大変よく話せ、口どまりながら宿を頼む我々を、快く引き受けて下さった。アー、もう歩かなくていい。

いつも山頂付近に雲をまいて、容易にその全貌を見せてくれなかった漢拏山は、登頂中もやはりその雲の中であつた。しかし16日、バスで西帰浦へ向うとちやう、きれいに晴れあがった空を従えたその優しい姿をみることでできた。

— 山とさよなら ごきげんよろしう —

— 雑 感 —

国立公園漢拏山は、まったくよく整備されている。自然をこわすようなむだな設備もなく、国の力の人れようがうかがわれた。また釜山市・済州市のフェリーの中でも、本土から観光に来る若者をたくさん見たが、その多くが漢拏山を目的の一つに持っているらしかった。

韓国の登山者のスタイルは、日本のそれと比べると色あざやかで、必ずといっていいほどチョッキを着ている。また、いつもの恰好のまま、山に來ているというような人達も多い。荷物は小さく、ほとんど小屋がけで山行するらしく、寝具は毛布であることが多い。我々が使っていたシュラフやメタクッカーがめずらしく、目にとまっていたようだ。意表をつかれたのは、ガソリンタンクや、時にはオイルコンロまで、そのまま手に持って登っていることがある。これでは手がだるくて危くて、とてもではないが、我々にはできそうもない。

また、人勝亭のロッジでは、ビニールのフロレンキに包まれた大きなポリバケツから出てきたキムチに、さすが韓国と感心させられた。

山を楽しむ人達にとりまかれた、ラッキーな山行であつた。

(17代)